

堀川開削410年をふりかえる

堀川をめぐる人びと

いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

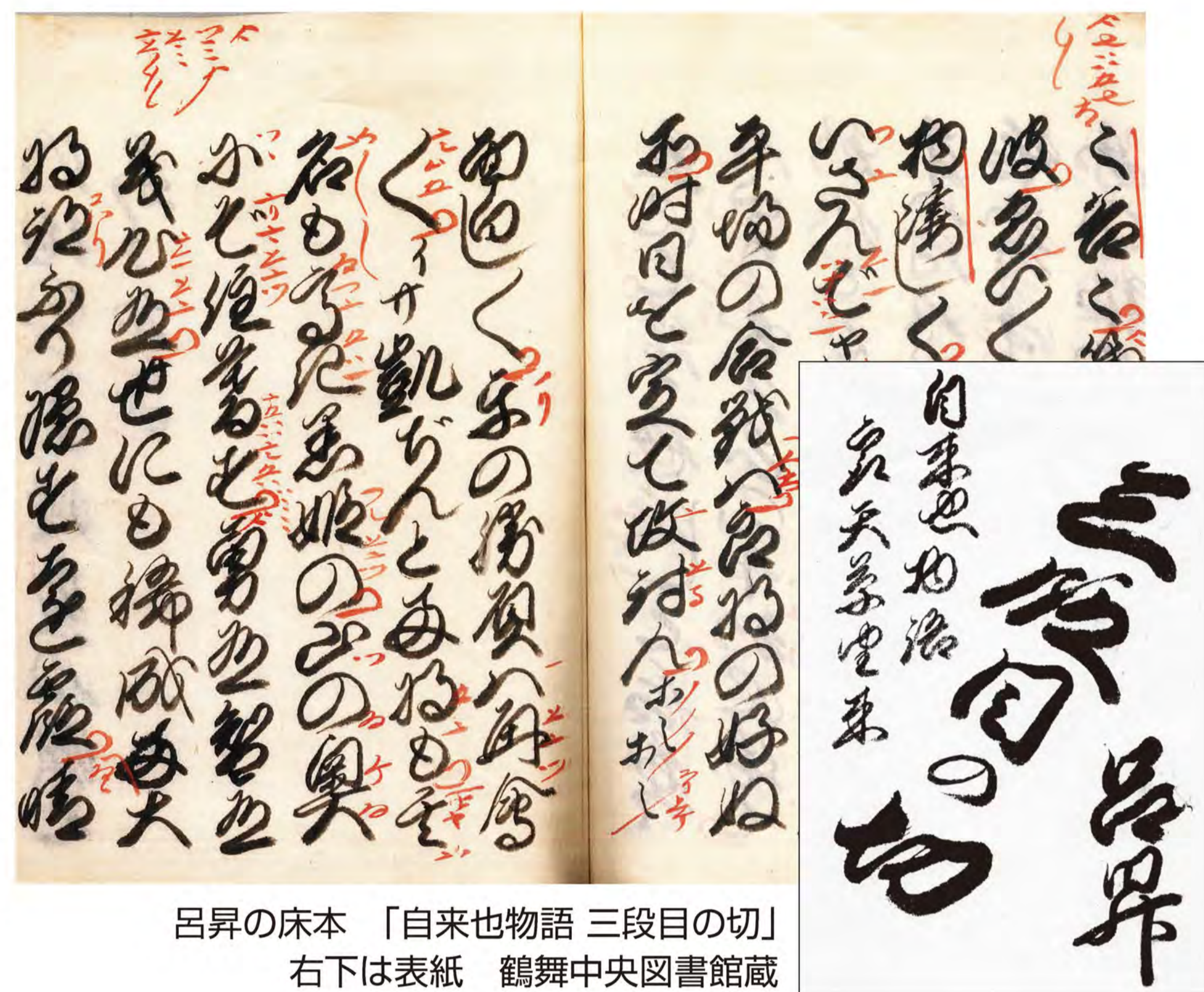
日本全国を夢中にさせた女義太夫 豊竹呂昇

女義太夫とは 明治には文人も追っかけ

義太夫は、浄瑠璃(三味線や琵琶等にのせて物語を語る音楽)の一種。江戸時代初期に始まったといわれる女義太夫だが、2度女芸禁止の法度が出され、明治に入り娘義太夫にむけ「どーする、どーする」と声をかけてくる「ドースル連」という追っかけファンまで誕生した。現在は女義太夫と呼び名も変わり、名古屋からは何人も娘義太夫が出ているが、その中に最大のスター豊竹呂昇もいる。呂昇は、気品もあり、容姿端麗、声も美しくまたよく伸びる声であり、節回しの良さでも大衆から志賀直哉や伊藤祐民のような芸能文化に通じた各界の人たちにまで愛された。

八事興正寺の山頂に引退の翌年建立の謝恩碑が建っている。呂昇の半身が浮き彫りになっていて、裏面には渡辺霞亭の撰文を刻んだ銅板があったが戦時中に盗まれ今も見つかっていない。幸いにも『愛知県金石文集』に碑文が残っているので、一部を紹介する。

由来、女義太夫は卑調聴くに堪えずとして、之を顧みる識者無かりしが、刀自(呂昇のこと)出でて刻苦勉励、遂に男女対立して遜色無きを示すに至り、女義太夫の地位始めて顕はる。



呂昇の床本「自来也物語 三段目の切」
右下は表紙 鶴舞中央図書館蔵

この文で、呂昇の功績がよくわかる。

永田仲 芸のみちへ

豊竹呂昇、本名 永田仲(仲子)。西区上宿(後の江川端町)で明治7年(1874)8月4日生まれる。尾張藩士だった父は明治維新後、江川端で塩物問屋を始めた。藩士の子であることと名古屋の土地柄もあり、小さいころから芸事として、浄瑠璃の一流派の常磐津を習っていた。満10歳の時に父を亡くし、その後は母親一人で仲子を育てることになった。最初に仲子の才能に気づいたのが、父の没後何かと世話をしてくれた叔父だった。義太夫好きで仲子に少し教えると良い声で、その後最初の師となる浪越大夫(のちの5代目土佐太夫)に、「みがけばモノになる」と才能を見出された。15歳のころ「仲路」という名で上宿の七福座で語り少しずつ人気も出ていった。

明治25年、大阪から豊竹呂太夫・竹本越太夫一座が名古屋千歳座に興行。土佐太夫師匠に付き添われて、太夫の宿に訪ねて教えを受けていた。音声豊富でなおかつ語り口ものびのびして2番目の師豊竹呂太夫がほれ込み師弟の縁を結ぶことになった。呂太夫が大阪へ戻る時に一緒に仲子も行くことになりその汽車の中で、呂太夫の呂と、どんどん上に昇っていくよう出世を願う昇とつけ「呂昇」と名付けられた。

独立し「都保美連」を立ち上げる

大阪で女義太夫の席で有名な播重にいきなり3枚目として出て、大役を果たす。播重に席を置きながら、文楽にも通い稽古の日々を過ごし、5年後独立し「都保美連」を立ち上げ、品位を正すことや、稽古を怠らないことなどを規約にして女義太夫の地位を上げるべく努力をした。

全国を回り、有楽座のこけら落して名人と共演

初めての東京は明治32年(1899)日本橋の宮松亭へ。2度目の上京は明治38年32歳で新富座、いよいよ

劇場へ出るようになった。この劇場進出は、女義太夫にとって画期的なことであった。劇場も満員御礼だった。

3度目の上京は明治40年、有楽座の柿落しに出ることとなり、文楽の師である名人の摂津大掾と共演するはこびになったのが、呂昇の名をより全国に広めることにつながった。まさに絶頂期、「呂昇の前に呂昇なし、呂昇の後に呂昇なし」といわれている。

その後も松竹の専属になりレコードを出し、朝鮮まで巡業するほどだったが、大正13年惜しむ声につつまれ51歳で引退。昭和5年(1930)狭心症の再発により神戸の自宅で逝去。享年57歳。

故郷名古屋に眠る呂昇

呂昇の遺骨は、大阪天王寺の大蓮寺に、そして生前、呂昇は自分が亡くなったら名古屋に骨を遺言していたので、名古屋の光音寺に分骨されている。光音寺の墓には、父親と一番の呂昇の理解者であり、また頭を坊主にして興行ゴロから呂昇を守っていた母も一緒に眠っている。

名古屋の大須にも呂昇ゆかりの地がある。呂昇が住んでいたことから、豊竹小路とつけられた道もある。

今でこそ男女平等というが、女義太夫という職を真摯に受け止め、また低く見られがちな地位を押し上げる努力を常にしたからこそ人気があったのではないか。

母に似て勝気だった呂昇。子供のころ、家の前に流れる江川でメダカを採り、近くの堀川ではフナを釣り、またある日は、泳げないのに堀川へ飛び込み溺れるなど、男勝りで勝気だったからこそ、今でも語り継がれるほど有名になったのかもしれない。



豊竹呂昇の晴れ姿 絵葉書



呂昇 絵葉書